DX

2022年9月20日作成、21日変更

三木

◆DX

DXは、Digital Transformationの略で、直訳して、「デジタル変革」とされる。

その目的は、「デジタル技術を社会に浸透させて人々の生活をより良いものへと変革すること」とされる。

企業活動においては、DXはデジタル技術によって生産性の向上や新しいビジネスの創出を目指すものである。

DXの対象は全産業であり、建設業界においても、すでに取り組みが始まっている。

◆デジタル技術

デジタルは、狭義には2値(0/1、Yes/No)による表現とされる。

物理的に2値を表現する手段として、電圧や電流のOn/Offが利用され、その実用的な素子としてトランジスタが利用される。

トランジスタは1940年代末に実用化され、以降デジタル化が急速に進み、現代社会はデジタル社会、と呼ばれるほどデジタル化は進んだ。

しかし、ここに至ってなお、DXへの取り組みが必要とされるのは、デジタル化の効果が不十分と評価されるためである。

◆DXとBIM

例えば、建設業界での図面作成は、昔は手書きだったものが、総じて1990年代にCAD化、つまりデジタル化された。

これにより、図面作成は効率化された。

さらに、2010年代以降は、2Dから3D、つまりBIMへの移行が進んでいる。

これにより、図面作成の先、つまり意思疎通やデータ利用などが、より効率化される。

DXが生産性の向上を目指すものとすれば、たしかにBIMはその手段として妥当である。

実際に、建設業界では、BIMの利用がDXの一つであると認識されているように思う。

◆BIMの将来

BIMの利用が進み、本来のBIM、つまりあらゆる情報が求められるようになれば、BIMはより複雑化し、より高い信頼性を求められるようになる。

そこに、DXが目指すもう一つのこと、つまり新しいビジネスの創出がありうる。

例えば、複雑で高い信頼性を持つBIMは、人の手で作成できなくなる。

そのため、BIMをAIでチェックすることや、BIMをAIで作成することも、新しいビジネスになるかもしれない。

また、あらゆる情報を保存できるBIMは、現在のBIMソフトでカバーできなくなる。

そのため、ソフトから独立したBIMのデータベースを運用することも、新しいビジネスになるかもしれない。

以上